

第118回 三方限古典塾（'16, 8, 18）

洪 自誠（1561～1616）「菜根譚」（その3 - 35）

1 纏脱は只自心に在るのみ。心了せば、則ち屠肆糟塵も、居然として浄土なり。然らずば、縦い一琴一鶴、一花一卉の、嗜好清しと雖も、魔障は終に在り。語に云う、「能く休さば塵境も真境と為り、未だ了せずば、僧家も是れ俗家なり」と。信なるかな。

後集 88

（意識） 外物に束縛されるのも、そこから解放されるのも、ただ自分の心一つにかかっている。心が自由であれば、例え肉屋や酒屋であろうと、そこはそのまま極楽浄土である。そうでないならば、琴を持ち鶴を飼い、草花を植えて暮らすような風雅な生活であろうとも、迷いを解き安心を得るのに障りとなる心の悪魔はついに追い払えない。

古語に「よく悟りきれば俗塵の世界も理想の仙境となり、心に迷いがあれば、例え僧の姿をしていても俗塵と変わりはない」とある。まったくそのとおりではないか。

（余説） 東郷平八郎や稲森和夫が師と仰いだ中村天風（1876～1968）の著『運命を拓く』に、『人生は心一つの置きどころ。人間の心で行う思い方、考え方が、人生の一切を良くもし、悪くもする、というのが人生支配の根本原則である』とあります。思い方や考え方が積極的ならば積極的なものができ、消極的ならば消極的なものができる。何事もその時の心の状態が成功を生み、また失敗に追いやります。これを宇野千代は”人生の魔法”と呼び、その根源を天風先生に教わったと述べています。老年や病氣、災害でも同じです。

（参考） ジェームズ・アレン 「自分の思いが人生を創る」

『心が変われば、態度が変わる。態度が変われば、行動が変わる。

行動が変われば、習慣が変わる。習慣が変われば、人格が変わる。

人格が変われば、運命が変わる。運命が変われば、人生が変わる』

2 万籟の寂寥たる中、忽ち一鳥の弄声するを聞かば、便ち許多の幽趣を喚び起こす。万卉の摧剥たる後、忽ち一枝の擢秀するを見れば、便ち無限の生機を触れ動かす。見るべし、性天未だ常には枯槁せず、機神最も宜しく触発すべきことを。

後集 90

（意識） ものみな静まりかえっている時、ふと鳥の一声が聞こえてくると、得も言われぬ味わいが生じてくる。万の草花が枯れ果てた後、一枝に花が咲くのを目にすると、自然の限りない生命力に感動を感じる。同じように、人間の本性であっても枯れきってしまうことはなく、物に触れて生き生きとした生命力をいつでも取り戻すことができる。

（余説） 今冬の寒波で、永年身近にあった庭や鉢の草木が数多く枯れました。ところが、春になり初夏となって、枯死したかような根や株や幹から小さい緑の芽が見えた時には、まさに上記の思いがしました。その時には老体の心身にも活力が湧いてきた感じでした。籟は音や響き、天籟は全ての音の根源、地籟は風などの自然が出す音、人籟は太鼓や笛などの人が出す音、万籟はそれらのすべての音です。

（参考） 莊子・齊物論「汝之を知るか。汝人籟を聞きて未だ地籟を聞かず、汝地籟を聞きて未だ天籟を聞かざるかな、と。」(152p)

3 白氏云う、「身心を放ちて、瞑然として大造に任するに如かず」と。晁氏云う、「身心を収めて、凝然として寂定に帰する如かず」と。放たば流れて猖狂と為り、収むれば枯寂に入る。唯善く身心を操るもののみ、欄柄手に在り、収放自如たり。 後集 91

(意訳) 白居易(白樂天)は「身も心も解放してゆったりと自然に任せるのには及ばない」と言っている。これに対して、晁補之は「身と心のはたらきを一点に集中して、精神を統一し、心を安定させるのには及ばない」と言っている。身心の解放の度が過ぎると、それに流されて気違いじみた行動になり、一方身心のはたきを抑制し過ぎると、生命の枯れ果てた状態になってしまう。ただ自己の身心をよく使いこなすことができる人だけは、しっかりと要点をとらえて、解放するも集中するも自由自在である。

(余説) 中唐の白居易(772~846)と宋の晁補之(1053~1110)何れも詩人です。解放と集中について対照的に述べています。ここで前回に出てきた「兩忘」を思い出します。兩忘とは、生と死、是と非、善と悪、苦と楽、愛と憎、内と外などの両者の対立を忘れることでした。「二相」「二元」「二見」のどちらかをと対立・執着するのではなく、「不二に座して」どちらであっても柔軟に使いこなすことができるようになりたいものです。この「不二に座す」ことは解放と集中にも適用できます。

(参考) 禅門三祖・僧燦「慎んで二見に住する勿れ」(信心銘)

4 文は拙を以て進み、道は拙を以て成る。一の拙の字に無限の意味あり。「桃源に犬吠え、桑間に鶏鳴く」が如きは、何等の淳龐ぞ。「寒潭の月、古木の鴉」に至りては、工巧の中に便ち衰颯の氣象有るを覚ゆ。 後集 93

(意訳) 文章を作るには、あまり技巧をこらさず訥々と心に思ったままを書くことによって上達する。道徳も小賢しさを捨て愚直に真心を尽くすことによって成就する。この拙という一字には、無限の意味や味わいが含まれている。六朝の詩人・陶淵明(356~427)『桃源郷の記』の「桃の花が咲く里に犬が鳴き、桑畑の中では鶏がなく」という文は、何と淳朴で味わいがあることか。これに対して「寒々とした深い淵に映る月影、枯れ木に止まったカラス」の表現は、技巧がありすぎてかえって生気がなく感じられる。

(余説) 「良寛」の生き方や「棟方志功」の版画、「相田みつを」の詩などを連想します。また、民芸の世界には、拙くとも拙いままで美しく感じさせる不思議さがあります。これらの何れも、自慢せず、ひけらかさず、飾り気がなく、銜いが見られませんが、心に強く訴えるものがあります。「拙」という字は、拙い・不器用・愚直・自分を謙遜しているなどの意味ですが、必ずしも悪い意味だけではなく、時に高い評価を与えられます。ただ、開き直って拙なるを正当化するのには、少し違うのではないかを思います。また、拙速と巧遅の何れを可とするかの議論もありますが、これも前章の「慎んで二見に住する勿れ」です。その時々で柔軟に使いこなすことが肝心であろうと思います。

(参考) 老子第45章「大直は屈なるが若く、大巧は拙なるが若く、大弁は訥なるが若し」韓非子「巧詐は拙誠に如かず」(飾り立てた作為は真心のこもった拙い行為に及ばない) 陶淵明「拙を守りて園田に帰る」